SMILE&MERRY

写真と街とが響きあう 東京・原宿にあふれた 笑顔と幸福のポスター

▶編集部

原宿の街角で参加希望者の撮影をする水谷氏

1月の上旬、東京・原宿のラフォーレ原宿が、女のコを中心とした、この街を歩く人々の写真とコメントをおり込んだポスターでいっぱいになった。展示期間中にも参加希望の人たちを撮影してポスターを制作、にぎわう街の女のコの写真がまたその街を刺激する空間が作られた。

その中心にいたのは、バスで出会った少女たちとのほんの数分間をまとめた写真集『Ｍｅｒｒｙ』を出している（この作品も大伸ばしでラフォーレミュージアムに展示された）アートディレクターの水谷孝次だった。さまざまな広告のデザインを手がけている人だ。

写真を使う仕事のなかで失われてきていると感じた「コミュニケーション」の機能、それを復活させるのは「カメラマンの存在が消え去って、被写体そのものが作り出す笑顔、幸福さの空気感」ではないかという。

ラフォーレミュージアムでの展示風景

そこで「Ｍｅｒｒｙ」をキーワードにカメラを持ったが、写真家・デザイナーとしての存在をできる限り消して捨てる作業は簡単ではない。

「デザイナーとしての私ではなく、〝原宿Ｍｅｒｒｙのおじさん〟にいい表情を撮ってもらう、その気分と瞬間をつくらなくちゃだめです」

また、大判のポスターをつぎつぎに作れたのも、デジタルカメラとプリンターがあったから。銀塩感材＋印刷ではとても予算が合わない。

「時代と〝Ｍｅｒｒｙ〟とテクノロジーが合致したんですね」

というわけだ。

「写真もデザインも、料理のテクニックを競う時代は終わり、もっと素材を見つめる時代なのでは」

たしかに、会場で記念写真を撮り、アンケート用紙にかじりついている笑顔の女のコたちに、デジタルプリンターで刷られた自分のポスターの感じはどうか、という質問は愚問に違いなかった。

会期前は35ミリコンパクトで、会期中はデジタル一眼レフで撮影、ソフト上でポスターに組んでデジタルプリンターで出力している。写真と街が同じ感覚で存在している

撮影＝杉浦章浩